

エルピス熊本 派遣活動

2016. 10. 17～22

10月17日(月)

熊本空港着陸のため高度を下げるとブルーシートに覆われた家屋が次第に増えていくことが機上からも見え、被災地の広がり大きさを感じた。

熊本空港到着後、新堀真之さんと熊本武蔵丘教会へ。神田さんと合流し、南阿蘇村立野地区へ。解体されることもなく全く手つかずとなった全壊家屋が半年を経てなお、眼前にあることに大きな違和感と大きな驚きを覚え息を呑んだ。谷合にたたずむ 100 世帯の集落は、土砂崩落の二次被害が予見されるため全世帯避難。県は発災後に災害危険区域とし、帰還できず全住民は避難所へ。今後、仮設住宅に入居することとなるも、その後の住まいの見通しは全くない状況。過去に水力発電所を受け入れた経緯で生まれた遺恨が根深くあったらしく、集落全体で避難所・仮設住宅に移ることはなく、住人は離散することとなるらしい。小さな地域コミュニティーでは一旦大きく口を開けたほころびを繕うことは、それもまた大した困難であることを思う。

エルピス熊本がある在日大韓キリスト教会熊本教会へ。夕刻、九州教区東日本大震災対策小委員会に陪席。これまでの支援への謝意とともにスタッフ研修会開催したことを伝え、2017 年度に向けたエマオの現状を報告。熊本地震発生以後、「東日本募金」は滞っている状態で、今後への財政的支援についての継続に課題があり、年度内に奥羽・東北教区への訪問の具体的検討を行う旨の協議をうかがった。

10月18日(火)

御船町指定避難所である御船町スポーツセンターでエルピス熊本のドリームカフェに参加。

参加者：約 15 名 V:8 名 北村淳子(熊本城東教会)・西岡裕芳(福岡警固)・神田道隆(熊本武蔵丘)・新堀真之(香椎)・松藤さん(バブ連)・三浦啓(桐生東部)・金聖孝(熊本)・柴田

10月31日を期限とした御船町の避難所であるここでのカフェは来週いっぱい(10/28)で終了。現在の避難者数は 37 名。最大時は 270 名。

10 時より 1F 体育館・アリーナ前のロビーでドリームカフェをはじめると、忘れ物があり開始時間が遅くなってお待たせすることになった。この日は 7 月の土用に予定されていた「うなぎ」の提供があったことで、話題は朝から「うなぎ」で持ち切り。避難者も少なくなって、カフェもさびしくなってきたことをうかがっていましたが、既に仮設住宅へ移動された方もこの日ばかりは結果「うなぎ効果」でカフェは久しぶりの再会の場となり、一日中にぎやかでした。また、談笑に耽るか方たちとは別に、終始手を休めることなくミサンガづくりに没頭されている避難者の高齢男性の姿に、居心地の良い空間を作り出してきたカフェの活動の一端を垣間見た。

東北・仙台から来たということで、今の被災地・被災者の様子に関心を寄せて話しかけてくださる方があり、阪神・淡路大震災をはじめ、中越地震、東日本大震災、そして熊本地震を経験された方も出会うことになりました。今も避難所に残る方の中には、罹災判定では「一部損壊」ということで仮設住宅への入居資格はなく、修復・改修を急いでいるものの半年を経ても業者の手が回らないことから退去の目途がなく途方に暮れている大家族がありました。

途中、金聖孝さんに同行し、益城町総合体育館避難所へ。こちらでは最大時 2200 名が居られ、現在は約 90 名。町長名による 9 月 16 日付「避難所の閉鎖時期について」の張り紙には、当初 10 か所に 16000 名を超える避難者でしたが 1,556 戸の仮設住宅建設されることで、今月末に閉鎖する旨が伝えられていました。こちらでは今日で最期のカフェ・デ・モンクが開催されていました。その後、「益城町テクノ仮設団地」を訪

間。こちらは 31 棟、93 軒が立ち並ぶ大規模な仮設住宅で空港にほど近く、テクノパークとして町が造成した地域である一方で、市街地から遠く高台にあり交通不便なことから不人気であったため、被災仮設商店に加えイオンスーパーがつくられるなど、生活環境整備が行われていました。スーパーは開業したばかりであることから、一般的なスーパーとは見劣りのない品揃えでしたが、利用客が仮設入居者に概ね限定されていることを考えると、同規模での経営を継続することにはいささか無理があると思える。住宅密集地であった益城町の中心部の被害は大きく、たてもものの海底撤去作業があちこちで進められていたが、まだまだ時間を要すると思われる。おそらくは仮設入居完了後、家財の搬出や家財の整理・撤収を終えて解体するのである。

御船町スポーツセンター避難所に戻り、終業の時刻を迎えたカフェの撤収。来週 28 日が最終となるカフェでの出会いを名残惜しむ方たちと「また明後日、木曜日に待ってます」と挨拶し、熊本教会へ帰還。スタッフに西田晶子スタッフと資材の後片付け。

今後、移り住んだ仮設住宅集会所などでカフェを待っている方たちの声が上がっていることは嬉しいことではあるが、現実的に開催可能な仮設住宅を絞り込むにあたっては、避難所で芽生えた関係性の維持はもちろんではあるが、個々の仮設住宅でのパートナーとなる方、住人の方々と二人三脚で運営できることなどに留意して慎重に開催を検討する必要があるため、今しばらくは仮設入居後の被災者の動向を見定める必要がある。

10月20日(木)

避難者：35 名 V:日下部遣志 小林拓哉 松本あづさ 藤原仰 深澤奨 山口鑛三 神田洋子 野中宏樹 大里恵美 北村順子 鈴木重宣 金聖孝 柴田 コーヒー：52 杯

ドリームカフェの準備を終えて、カフェは北村さんに任せて避難所の S さん宅の家財整理と廃棄物の搬出のため、軽トラック、ドリーム号(関東教区号)、佐世保号(佐世保教会)の 3 台が出動し対応。御船町菅中原団地、山林に囲まれたそのロケーションはのどかな別荘地のような瀟洒な住宅地。25 年前に造成された知名度も高い住宅地だったようですが、全住人が避難して半年間放置された家々は外観からも傷みを感じられるほど荒れている様子が胸が痛む。元々は湿地であったこともあり、小雨もあって蒸し暑さを感じますが、周囲を囲む山林、傾斜地が地崩れを起こし道路を塞いだままとなっていて、今後も土砂崩落の二次被害が懸念されるため災害危険地域となっていて、住人は戻ることはない。その奥まった一角に S さん宅はあった。人気のない住宅街のあちこちには不法投棄された家財ゴミが放置されていて、そのためにか異臭を放っていた。S さん宅には下見がなされて段取りが組まれてはいたものの、実際には自力で片付けることに手が回っておらず、結果 8 人を投入したことで何とか作業を進めることが出来た。箆箆 2 竿とその衣類、小物家電や家具雑貨を廃棄するため、8 人がかりで二階から搬出。軽トラックとドリーム号に満載し仮置き場、処分場へ向うも、当初確認していた仮置き場や処分場も細かな分別をするために分けられた捨て場所を探すことにも時間を要した。当然、処理能力を超えた廃棄物が地震後大量に持ち込まれることとなって、置き場にも苦慮せざるを得ないことがわかる。分別されたとはいえ雑多に持ち込まれた廃棄物の山をなくすことだけでも相当の時間を要することになる。想像以上に廃棄に時間を要したため、この日の作業は終了し明日に継続。

ドリームカフェでは毎週木曜に現れる N さんがギターを爪弾き歌っていて、和やかな時間がありました。最後の締めはいつものように「上を向いて歩こう」。エルピス熊本に戻って、資材の調達・確認をし明日に備えます。この日は、作業で体に染みついたように感じる臭気を洗い流すため、温浴施設へ出かけました。

10月21日(金)

避難者:35名 V:KCCJ西南地方会女性会 日下部遣志 小林拓哉 松本あづさ 神田道隆 樋口洋一 鈴木重宣 金聖孝 柴田

樋口さんが合流しエルピスを出発。御船町スポーツセンター避難所到着後ドリームカフェ準備、10時開店。避難者の影も疎ら。朝一番はHさん宅から家具の搬出移動の作業。その後、昨日の作業継続のためSさん宅(御船町菅中原団地)にて、家財(冷蔵庫・洗濯機・机・椅子・液晶テレビ・カラーボックスなど)をみなし仮設に搬出入。小雨が降り始めたため希望全ての家財の搬出が出来ず、午前中一杯で作業終了。昨日同様に、Sさんが昼食にと全員分の仕出し弁当を提供くださり、ガランとしたみなし仮設の居室でみんなで頂くこととなった。みなし仮設での生活が始まろうとしているが、いつまでここにいることになるのかと考えると、まさにこれからがスタートであるように思えました。

ドリームカフェでは西南地方会女性会が活躍。しかし、退去間近であるためにか避難者の来店は少ない。14時7分最大震度6弱の鳥取中部地震発生。熊本での有感なし。緊急地震速報以後、災害報道に一同釘づけ。その後カフェでも鳥取の状況に心配をしながらも、期せずして熊本地震発災当時の様子を詳しくうかがうことになった。「30分位揺れとったばい。スマホ持って見とったけん、間違いなか」、「ドーンと突き上げられテレビも2m吹っ飛んで、その後に横揺れが続いた」、「あんな恐ろしか地震、はじめてたい」と今も残る恐怖体験を話してくださった。来週の後3回を残し、ここ避難所でのカフェは終了となることで、行きかう避難者の方々に、金さん、鈴木さんが声を掛けておられ、今後のお互いの歩みに気遣っている様子が印象的であった。この日、急遽金さんが東京へ出かけることとなったため、現場で解散し、各々帰路に就いたが、最後までSさんが見送ってくださった。

《 所 感 》

ようやく避難所から仮設へと移り、少しだけ落ち着いた生活へと向かう被災者の方たちに出会ったが、何れの方もこれからも続く避難生活への不安を口にされていたことが印象的でした。その背後には、カフェを通じて避難所でつながれてきた人たちが、またバラバラにされることへの思い、即ちこのカフェが避難所で果たしてきた役割の大きさを物語っていたと思われまます。ただコーヒーを淹れて飲む、そこには豆から挽いた香りとともに、被災者を一生懸命にもてなそうとするこだわりが滲んでいたに違いないと感じました。

今後、仮設住宅へと向けた新たな可へのアプローチが模索されることになる中、福岡や長崎、佐世保や鹿児島、佐賀や宮崎から思いが寄せられて活動されてきましたが、実際には距離と時間の長さが示す交通費、即ち長期的に関わることへの財源を確保、捻出が活動の継続を見通すために必須条件となると思われる。そのためにも、今カフェの意義をそこで得た被災者とのつながりを最大限に評価すべき必要がある。今後は、そのための発信力が中長期支援を支えるために大きな役割を果たすことになることが考えられこの課題の克服が急務。また、そのために、情報を繋ぐ人材の発掘のためのきっかけづくりとして、「百聞は一見にしかず」のフィールドスタディーなどを企画し、エルピスへの支援と被災地の現状を訴える必要があると考えまます。

報告:柴田信也